

スペイン語についての雑感



影が薄い「謙譲」の表現

一口に言ってスペイン語は日本人にとって、英語より発音しやすい外国語ではないかと思えます。それは、「アエイオウ」の母音が基本的に日本語と同じで、例外もありますが、つづり字をそのままローマ字読みにすれば、発音の原則を知らなくてもほぼ通ずるからです。もちろん、[L]と[R]また[F]と[J]の発音の区別などは難しいですが、英語のあの複雑な唇と舌の動かし方や、詰まった感じの発音などが少ないからです。

それに比べると、日本語は外国人がマスターするには極端に難しい言語のように思われます。努力をすればある程度話すことはできるでしょう。でも、読んだり、書いたりする段になると、それは想像以上に難しくなってきます。まず文字が三種類もあること。ひらがな、カタカナともに50字ですが、漢字となると、普通に社会生活をできるために知っておく文字は2000字近くになります。

その上に、もっと難しいことは、日本語には尊敬語、謙譲語、丁寧語の三つがあり、話し相手や状況に合う言葉を探さなければならないということです。というのも、日本社会では、常にへりくだった謙譲の表現が要求されるからです。

たとえば、自分を表現するのに10近くの言い方がありますね。私(わたくし)、私(わたし)、僕、俺、我、我、ウチ、手前、小生、等々。「わたくし」はより丁寧で上質な表現。「わたし」は比較的丁寧な表現で最も一般的に使われています。「僕」「俺」「我」ともに男性が使用。このうち、「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧さを欠き、「我」はやや古い表現です。「ウチ」は両性によって使われます。「手前」もへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われます。



繰り返しますが、日本の社会で大事なものは「謙譲」の心なのです。これを良くわきまえないと、周りから「あいつは傲慢だ、頭が高い」と言われかねないのです。

これは、前回触れたジェスチャーにもつながるものです。

日本語のやり取りを聞いていれば、およそ二人の上下関係はわかります。スペイン語には「豚児」とか「愚妻」といった「謙譲」の表現もないような気がします。さすがに日本国内でも、こうした言葉が使われるのが少なくなっただけですが、スペインやラテン・アメリカでは「謙譲」という生き方そのものが薄いというのが実感です。もともとラテンの気質と明るい太陽の下で、日本的な奥ゆかしさとか謙譲の美德などは育ちにくかったのでしょう。

一方、日本語には名詞に「性」がなく複数形ありません。動詞は人称、単数・複数によっても変化しないところは楽ですが、同意語、同義語の過多があります。例えば、自らを表現するのに、先に挙げたように実に多くの言葉が使われるのに対し、スペイン語では「Yo」の一語で単純です。こうした言葉の違いが思考形態、行動の違いを生み出している一要因にもなっているのでしょう。

